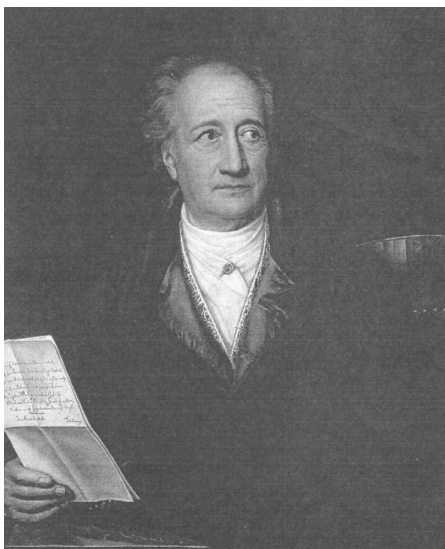


『大地の友, ゲーテ』 ①はじめに

国分義司¹⁾

1. ゲーテと自然研究

ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)は、有名な戯曲『ファウスト』をはじめ、54の戯曲、『若きヴェルターへの悩み』、『ヴィルヘルム・マイスター(演劇的使命, 修業時代, 遍歴時代)』や『親和力』などの小説, さらに『野バラ』、『五月の歌』、『魔王』などの珠玉の名編を含むおよそ1,600に及ぶ詩, 1,000を数える教訓詩と格言詩, 叙事詩などをこの世に残した詩人, 文豪として全世界に知られている。そのほかにも彼の著作には、膨大な量の文学や哲学, 芸術学などの論文, 自叙伝, 翻訳等もあり, さらに特筆すべきことは、自然科学全般, すなわち骨学, 比較解剖学, 動植物学, 形態学, 光学, 色彩学, 地質鉱物学, 気象学などの著述が含まれているなど, その創作活動の範囲が多岐にわたっていることである。



第1図 ゲーテ70歳時(1828年)の肖像。

ゲーテの著作のうちで、自然科学関連のものは、彼の大部分の作品を載せたヴァイマル版ゲーテ全集(Goethes Werke. Weimarer Sophienausgabe, 以下、引用箇所を示す場合も含めてWA, とのみ表記)全143巻のうち、13巻を占めている。これは全作品のほぼ1割に当たり、少ないと言えるが、この全集には書簡集50巻と日記37巻も含まれているので、文学, 哲学, 芸術学などの論文, さらに自伝や翻訳などのすべてを合わせた43巻と比べて見た時、それは決して少ないとも言えない。

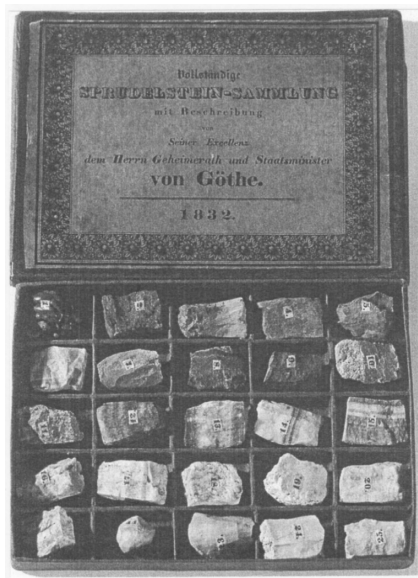
ただゲーテの自然科学関係の著作の中には、彼がニュートンの光学に対抗し、生涯をかけて書き続けた大作『色彩学』が含まれており、それに比べると地質, 鉱物学に関するものは、いわゆる大著はなく、比較的短い論文や草稿が多い。しかし実は、地球や岩石の起源などについての記述は、論文のほかにも戯曲『ファウスト』や長編小説『ヴィルヘルムマイスターの遍歴時代』などの文学作品にも取り入れられ、岩石や鉱物についてのそれも、『イタリア紀行』や『スイス紀行』などの旅行記のかなりの部分を占め、また、『詩と真実』などでもたびたび触れている。さらにその膨大などと言って良い地質学上の調査や探検の記録, 日記や書簡を含めると、これは、他の自然科学の分野の著書に十分に匹敵するものである。

ゲーテが自然研究に従事した時期は、生物学研究は1784年から、光学色彩学研究は1790-1810年に頂点を迎え、気象学研究は1815年以降である。これに対して彼の地質, 鉱物学への関心は最も早く、すでに1775年ごろから始まっており、しかもその最晩年に至るまで続いている。

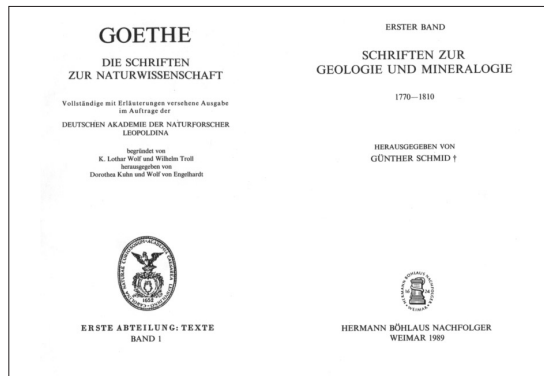
彼が地質学に目覚めた18世紀後半は、鉱物蒐集熱が盛んで、その時代の社会現象に近いものになっていた。『鉱物学会』という名の文化団体が各地に設立

1) 名古屋工業大学, 名古屋学芸大学名誉教授

キーワード: ゲーテ, 地質学



第2図 ゲーテの鉱物収集品の一部。上部には「1832年、枢密顧問官並びに大臣閣下ゲーテとの記載のある全霰石の収集品」とある。



第3図 レオポルディーナ版ゲーテ全集、第7巻の表紙。

うか。もちろんそれは、その内容如何によるだろうが、もし誰かが、それらの遺稿のひとつひとつを読破して、彼の関心の推移のすべてを初めから克明にたどっていったならば、その人はきっと、ゲーテは単なる自然愛好家から一歩抜け出た自然研究者であり、その現代の地質学史に残る業績があるかどうかは別として、少なくとも当時としては、その筋の専門家に決して引けを取らない一地質学者であったと、認めざるを得なくなるのではないだろうか。

2. ゲーテイト

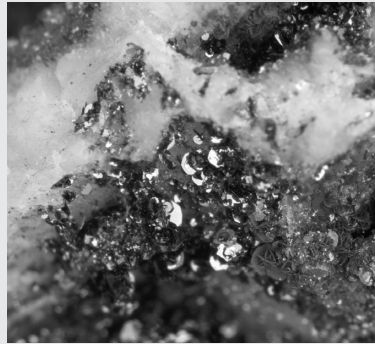
私事だが、1979/80年には、私はチュービンゲン大学に研究滞在し、文学部に籍をおいていた。そのころの私は、研究テーマの関係上、初めてゲーテの自然科学の一分野の「形態学」に関心を向けた時期だったが、同じ大学の宿舎内でのある出会いから、同大学付属の自然史学博物館への出入りや、化石採取旅行にお供をする機会が何度かあった。もちろん当時はまだ、研究テーマをゲーテの地質学、鉱物学、地球史学などにまで広げることなど全く考えていなかったもので、それらは単なる気晴らしのつもりであった。ただこれらのことが刺激になって、ゲーテの文献の中で、これまで全く無関心だった岩石や地球史関係の述語に出くわした時、目に留まることが多くなったことは確かである。

たとえば、ゲーテイト(Göthit)という学名の付いた鉱物は、これまで、「この美しい鉱物」は従来から「ルビー鉱(Rubinglimmer)」と呼ばれていて、「クラーマーとアッペンバッハ」が発見したものと書かれているゲーテ

され、高い地位にある人が支援者となっただけでなく、その会員証が一種のステータスシンボルとして贈り物にされたり、石のコレクションが子供へのクリスマスプレゼントになったりした。ゲーテの父(1710-1782)も小さな大理石と天然石の標本を持っていたことが知られているが、哲学者たちは岩石の生成に関する論文をしたためたり、ロマン主義の詩人たちもその一翼を担っていた。

ゲーテもその生涯に、他の人のそれを圧倒する18,000個もの鉱物を集めている。しかし集めただけでは、彼も当時の文化人並みの一収集家であったことが証明されるにすぎない。同じく彼は、ソシュール(H・Benedicte de Saussure, 1740-1799)の『アルプス旅行記』を読破した上でスイスを旅し、またイタリアへは、長い期間にわたって滞在して、帰国後に旅行記の出版などもしている。だが、これらのことさえ、その表面的な行動だけをたどると、彼は単なる紀行作家にみなされてしまうにすぎない。

では、レオポルディーナ版ゲーテ全集(Goethe, Die Schriften zur Naturwissenschaft. Leopoldina=Ausgabe. 以下、LAとのみ表記)の中に、2巻、約800頁にわたって収録されている彼の地質学関連の計223頁の遺稿をもって、彼が地質学者であったことを証明することは可能である



Göthit : 本来のゲーテイトは、オルト斜方結晶状の、 γ -FeO(OH), (D 17/2h) 薄板状の(0/0)以後に形成された割れ目の多い金属で、今日、Lepidokrokitという名で呼ばれているものの細片中には、透き通ったルビー状の赤や、黄に至るものもある(写真右側)、その産地は、以前からジューゲン付近の鉄鉱山が有名。今日ゲーサイト(Goethite [英])と呼ばれている「針鉄鉱」は、ここに記述されている鉱物と同じくオルト斜方結晶状の、 α -FeO(OH), (D 16/2h)で(写真左側)、本来のゲーテイトに由来するものである。

の草稿(LA. I-2. p.171)があることはわかっていた。

しかし上記の2人の人物についてだけでなく、彼らがどこでそれを採取し、何時、誰が、何故ゲーテの名を付けたのか等については、当時は特に気にはしていなかった。だからこの留学中、「ゲーテ年鑑」に載った「ゲーテイト」に関する論文、ホースト・フランケ/フォルカー・ヴァール共著、『鉱物名「ゲーテイト」の成立に寄せて』(Horst Franke/Volker Wahl "Zur Entstehung des Mineralnamens Göthit" [GOETHE JAHRBUCH, Band 95, 1978 Hermann Böhlau Nachfolger, Weimar])があることにも気付いてはいたが、それを読んだのはようやく最近になってからである。

改めて読んだ同書によると、この命名に関わった人物は、ゲーテの秘書兼友人で、言語学者のリーマー(F. W. Riemer)、イェナ大学教授兼総合鉱物研究所所長のレンツ(J. G. Lenz)、それに牧師兼山岳官のアッヘンバッハ(H. A. Achenbach)と、ジューゲン(Siegen, ドイツNordrhein-Westfalen州の都市名、粘板岩とグレイワッケに富む地層、鉄鉱山で有名)出身の鉱区監督官エンゲルス(J. D. Engels)の4人となっている。ということは、先に見たゲーテの記憶では、エンゲルスとクラマーは取り違えられていたことになる。クラマーもアッヘンバッハの友人で、彼ともゲーテは、何度か岩石採取旅行に同行したことがあったから、このような間違いをしたのだろう。

この発端は、ゲーテが56歳を数えた1806年2月10日に、レンツが率いる総合鉱物研究所の外務担当

官に任命された直後のアッヘンバッハと、その知人のエンゲルスが、それぞれ別々の手紙で、所長のレンツに宛てて、彼らがジューゲン鉱区の配下にあるアイザーフェルト鉄鉱山近郊で見つけた「並外れて美しい」「ルビー状赤色を呈する鉄鉱石」に、Göthenit(アッヘンバッハの案)、あるいはGoethenit(エンゲルスの案)と命名すべきと提案したことだった。

2人はその理由については、「この素晴らしい鉱石と、優れて偉大なゲーテの精神との類似性から」とだけしか言っていない。しかしこの2人の提案は、レンツにとって最も歓迎すべきものであったようだ。レンツはこの研究所の後援者であり、地質学、鉱物学に深い造詣を持ち、所員たちから尊敬されていた鉱山委員会所管大臣ゲーテの栄誉のために、この研究所の長としての権限で、可能な限りの評価の手段を尽くしたいと、かねがね思っていたようだからである。

レンツは、リーマーに相談を持ちかけた際に、一案としてその鉱物名をGoeditか、Goetenitとしたい旨提案した。これに対して、言語学の素養のあるリーマーは、発声学上の理由からGoethitが良いと言う。しかしレンツは、最終的にはGöthitとした。Goetheという実名があからさまになるのを避けたのかもしれないが、真相はよくわからない。しかもレンツは、その名を登録したことをすぐにはゲーテに報告しなかった。何らかのわだかまりか、言いそびれる理由があったのか

もしれない、ゲーテがその事実を知ったのは数ヵ月後、公刊されたレンツの私的小冊子(1806年イエナ)を読んだ時で、そこには、この鉱物名は「我々の最も尊敬する大臣、ゲーテ閣下の栄誉のために命名された」と書かれていた。

ゲーテはその時点では、このように自分で見つけたものでもない石に付けられたこの学名は、程なく消えてしまふだろうと予測し、概してそれ以上の興味を示していないように見せていた。14年後の1820年になって、ゲーテは、彼の私的な自然科学雑誌『形態学のために』の中で、改めてそれについて言及し、その名が適切とは思わないことを明言している。しかしこの石を採取した二人には、それまでたびたびゲーテの岩石採取に同行していたこともあって、おそらく自分に対する彼らの「愛情」が込められているのだろうかからと、感謝の意を示している。

鉱物の学名の命名が、功労あった鉱物学者や、他の高名な人物たち、たとえば鉱物学界の要請に報いた人たちに充てたのは、19世紀の前半は特に顕著であった。それゆえ、ゲーテにこの栄誉を授与することは、特に鉱物学会の長の側からすれば、イエナ大学における鉱物学の発展に尽くした最大の功労に対する感謝の気持ちとして当然なすべきことであった。なぜならば、鉱物学のような自然研究は、ちょうどドイツにおける1782年から1831年ごろのそのケースであったような飛躍は、ゲーテの援助なしでは決してあり得なかったからである。

レンツが後に所長を務めたイエナ大学の総合鉱物研究所の設立は、故人となった某博士の博物標本室を、ヴァイマルの若き公爵カール・アウグスト(Carl August, Herzog von Sachsen-Weimar 1757-1828)が1778年に買い取っていたものを、1782年にイエナ城内に配置したことに始まった。そしてその全盛期を迎えるにあたっては、レンツの知識と勤勉もあったが、ゲーテの持続的な指導、提言、及び同学研究所が国内外に認知されるべく、しかるべき配慮があった。そのゲーテの功績をレンツは顕彰したかったのであろう。

3. 『地球との対話』

これも私事ではあるが、直近でヴァイマル訪問の機会を得たのは、2007年の夏だった。その時、できればそこで、ゲーテに地学や鉱物学、岩石学への関心



第4図 『ゲーテ、地球との対話、-彼の生涯と作品のなかの風景、岩石、鉱物そして地球史-』の表紙。

を起こさせたゆかりの地のいくつかにも、足を踏み入りたいと願っていた。結果として、イルメナウ、ハルツを含むチューリンゲン地方、ボヘミアのケーブ(旧ドイツ名イエガー)、それにゲーテのイタリア旅行の最初の地のブレンナー峠から、ガルダ湖畔にかけてのいくつかの町を訪れることができた。

さらにヴァイマルでは、とある本屋の店先で、最近発行されたゲーテの地質学、鉱物学に関する本があるかどうかを問うてみた。その時差し出されたのがヴォルフ・フォン・エンゲルハルト著、『ゲーテ、地球との対話、-彼の生涯と作品の中の風景、岩石、鉱物そして地球史-』(Wolf von Engelhardt "Goethe im Gespräch mit der Erde, Landschaft, Gesteine, Mineralien, und Erdgeschichte in seinem Leben und Werk" Hermann Böhlau Nachfolger, Weimar 2003, 以下、『地球との対話』とのみ表記)であった。

著者のエンゲルハルト(1910-2008)は、定年退職時(1978年)まではチュービンゲン大学の正教授として、鉱物、岩石学研究所の所長の任に当たっていた。退職後もしばらくは、その著作活動の多くは、彼の専門分野に関するものであった。しかしその後、先に挙げたゲーテの自然科学に関する著作の集大成である

レオポルディーナ版ゲーテ全集の校訂の仕事に従事するようになり、最晩年には、『地球との対話』のほかにも、数冊のゲーテに関する著述を公にしている。ちなみに同書の成立は、彼の没年(2008年)より5年前の、彼が93歳時のものである。

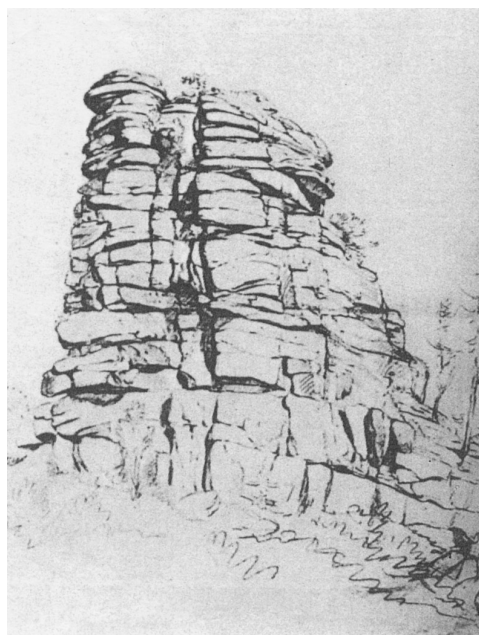
この本を手にした当初、もともとこの分野の門外漢の私は、当然それに深入りすることはないと心に決めていた。しかし同書の前書きや、初めの数頁をめくっているうちに、今、このエンゲルハルトの労作を丁寧に読み、ゲーテの岩石や鉱物、地球の成り立ちなどへの関心の推移を見ていくことは、自分の楽しみではあるが、地質学者たちに紹介することも、意義のないことではないと、次第に思うようになってきた。

この本の中で、著者のエンゲルハルトは、ゲーテが、彼が生きたドイツにおける地質学の黎明期に、この学問への関心を次第に高め、それと取り組む様子を、客観的に記述していることは言うまでもないが、特筆すべきことは、彼は、それらの多くを、日本ではこれまであまり知られていなかった新資料に基づいて記述していることである。さらに彼は、ゲーテの科学と芸術と哲学との結び付きから来る展望においても、ゲーテの詩的作品に新たな光を当てている。つまり彼は、ゲーテの自然科学への取り組みは、彼の詩人として本性と資質を高め、詩作に深みと広がりを与えるものとして捉えているのである。それゆえ、この『地球との対話』は、自然科学が専門分野の学者の目で捉えたゲーテ作品の新たな解釈の書であるとも、新たなゲーテ作品の解説の書であるとも言えるのである。

4. 地質学者ゲーテ

ところでゲーテの業績全体は、今日の地質学史の中でどのように位置付けられているのだろうか。この点に関しては、エンゲルハルトも、ゲーテの地質学や鉱物学に関する諸研究は、今日の科学に照らして見た時、もはや見るべきものはほとんどない、と断じている。

確かにゲーテは、彼の地質学上の成果においては、とりたてて重要な発見や独創的なものを残してはいないかもしれない。しかしそれにもかかわらず、このエンゲルハルトによって書かれたゲーテの地質学への取り組みについての小伝の中には、読者を惹き



第5図 花崗岩節理が豊富に見られるシールケ付近のプロッケン花崗岩中のチャートの巨岩体。

つける何かが、至るところに潜んでいるのがわかる。それについては、さし当りここでは、ゲーテの未知のものへの探究心の旺盛さ、その情熱などの言葉を挙げておくに留めておく。しかし彼の地質学へ向かう態度そのものは、ヴァイマルの社交界において彼がしばしば見せた、いくつかの、うわべだけの気まぐれな行為からは想像もつかないほど真摯なものであったことは、容易に読み取ることができるのである。

その一方で、ゲーテが先鞭をつけはしたが、彼のもとでは実を結ばず、数十年後の地質学がようやくその本質に到達したのもなくはない。化石による地質年代判定への展望や、漂石による氷河学への関心の先取りなどがそれである。また、彩色地質図の作成に、いくつかの提案をしたこと、先に挙げた「鉱物学研究所」や地質学会の創設に関与したことなど、小さいとは言えない功績もいくつかある。

さらに、これも地質学的研究においては失敗に終わったとみなされているものだが、ゲーテの思想形成や、彼の植物学や比較解剖学などの、他の自然科学の分野において、ある一定の成果を取めたいくつかのゲーテの取り組みもある。

その一つは、彼の「形態学」の根源である「原形態」

という観念の形成に至る発想である。形態学は、本来「有機体の生成と変成の学」であるが、ゲーテは、それを無機質の岩石や、鉱物にも適用することが、可能ではないかと考えたようだ。花崗岩を「原岩石」とみなし、花崗岩はすべての他の岩石に変成しうるのではないかというものである。

この考え方を進めていったのはイタリアから帰国後になってからであり、本稿がここで取り上げる範囲の外にあるものだが、その思想形成の端緒を、ゲーテは、ヴァイマル滞在のこの時代にすでに開いていたようだ。それは彼の、花崗岩塊の節理の測定への取り組みや、その結晶(メタモルフォーゼ)理論についての思索などに見られるのである。

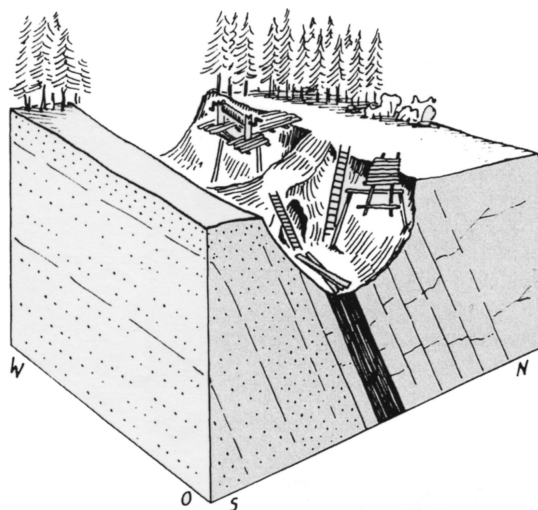
5. 大地の友

一般にゲーテの地質学研究的の時期については、4期に大別され、第1期は1770年-1778年、第2期は1779年-1788年、第3期は1790年-1806年、第4期は1806年-1832年とされている。本稿では、ゲーテがイタリア旅行に出発する直前までの、ヴァイマル時代の約10年間(1775-86)を中心に、ゲーテの歩みを検証したいと思っている。

この時代に限定した理由の一つは、この期は、ゲーテが、かなり純粋に地質学の本質に接近し、一見して無秩序な地質現象のもとに隠されているさまざまな自然の法則性を求めて、真剣に模索していた時期であったからである。

これもエンゲルハルトが指摘していることだが、ゲーテの地質学を問題にする時、より重要なのは、そこに見られる彼の基本姿勢そのものである。ゲーテは「耳を澄まして地球という自然が語りかけてくる言葉に聞き入り、その生の声を自分のものにしようとする態度」を常に持ち続けていた。彼のこの態度は、必然的に自然科学が求める自然の事象の客観化へと彼自身を導いていったが、これについては、1779年のカール・アウグスト公のお供として出向いたスイス旅行の途上、ピルス峡谷での体験をシュタイン夫人(Charlotte von Stein)宛に書いた次のような注目すべき一文がある。

「誰もが、暗がりにいると、この奇怪な形をした岩石の生成と生命をぼんやりと予感します。(…)どのような革命が、その後それらを動かし、(…)人々



第6図 ゲーテ筆の露天掘り採掘場の壊れた巻き上げ機や梯子などの復元図-O・ヴァーゲンブレット著:『ゲーテとイルメナウ鉱山』、フライベルク、2006 49頁。

は心の深いところで感じ取ります。ここには恣意的なものは何一つなく、あるのは、ゆっくりと動いている永遠の法則で、その不思議な地域をのりこえて、足をひきずって歩き渡れる快適な道を見つけるのは、人間だけなのです。」(10月3日, WAIV. 4. 69-72)

ゲーテは、岩石も地球も「長い時間をかけてゆっくり動いている」ことを予感し、そこにあるはずの「法則」を見極めたいという欲求を、すでにこの時期に持ち始めている。

二つ目の理由は、もともとゲーテに地質学への関心を植えつけたのは、折りしもカール・アウグスト公が着手した1739年来操業停止のままになっていた、ヴァイマル近郊のイルメナウ鉱山の再興事業に関わったことである。

この事業が、ゲーテにもたらしたのは、地下資源のある現場を目の当たりにする機会と、鉱山関係の技術者や地質学者との出会いであった。ゲーテは喜々として採掘現場や関連施設へ足しげく通うことになったが、さらに関心が高まるにつれて、ハルツやアルプスなどの地質学的に重要な地にも歩みを進め、同時に標本や関連の書物を読みあさったりした。つまり師を持ち、師とともに現場に足しげく行くこと、書物や資料を集め、そこから学ぶことなどを、彼は闊達に、情熱的に行ったのである。これらはゲーテに限らず、

水成・火成論争：玄武岩の生成について、その起源を水に求めるか、火に求めるかについて、1788年の後半から1795年ごろまで、主にドイツのフライベルク大学教授のヴェルナー教授と彼の弟子たちによって戦わされた論争。きっかけは、スイスの雑誌の編纂者ヘプナー(A・Höpfner, 1759-1813)が、1席25ターラーの懸賞金で課題論文「HornschieferやWackeと呼ばれる岩石について説明せよ」(第1回目)、「玄武岩とは何か、火成的か、否か」(第2回目)を募集したことに始まった。特に水成論のヴェルナーと彼の弟子で、ゲーテの研究助手で火成説を主張したフォークト(J・W・Voigt, 1752-

1821)の間の論争は、その激しさを増し、次第に泥仕合の様相を呈するまでになった。その後、同じくヴェルナーの教えを受けて、初めは水成論者であったフンボルト(A・von Humboldt, 1769-1859)や、ブーフ(L・v, Buch, 1774-1852)も火成論者に転じていった。

(なお、この論争の詳細については、誌面に余裕があれば、巷間に伝わるハットン対ヴェルナーの水・火論争を含めて、本稿の③で取り上げることにする)

地質学者であるための必要条件であったが、これらの機会が、ゲーテにはこの時代に十分に恵まれただけでなく、それを十分に活用したのである。

1784年、ゲーテは、このころすでに一人の自然研究者として自立しつつあった時期であったが、これまでたびたび訪れたことのあるチューリンゲンへの何度目かの旅の途上、シュタイン夫人に宛てた手紙(6月9日)の中で、次のように語っている。

「今日、私は初めて、その岩への訪問を果たし、とても満足しました。この旅で、私はさまざまなことを、やっと飲み込めてきました。それは、ただひたすら捜すこと、何度も何度もくり返し来ることです。」(WA IV. 6. 294f)

第三の理由は、この時期は、ゲーテがイタリア滞中に顕著になった「水成・火成論争」に、まだ巻き込まれていなかったこともあって、彼は、それらにかなり柔軟に対処することができ、彼独自の思索にふけることが可能な時期であった。

後に水成説の総師などと言われたフライベルク大学のヴェルナー教授(Abraham Gottlob Werner, 1749-1817)とは、まだ面識がないだけでなく、彼の水成論の書も、この時期にはまだ書かれていなかった。しかしゲーテがその当時書物によって学んだソシュールやフュクセル(Georg Christian Fuchsel, 1722-1773)たちは、現代から見れば、その論拠は水成説に基づいていると見られている。というより、そのころのドイツは、水成説とみなされる考え方にいたる研究熱がかもし出されていた時期にあった。ゲーテはそれゆえ、少なくともその当時は、この言葉そのものには囚われる必要はな

かったわけである。

それとは別に火成説については、ゲーテは、すでに自ら書物を取り寄せて、フランスのオーヴェルニュ地方で火山の痕跡を調べたゲタル(J. E. Guettard, 1715-1786)やサン・フォン(Faujas de, 1742-1819)などの説を学び、弟子のフォークト(Johann Carl Wilhelm Voigt, 1752-1821)を現地調査に向かわせたりしている。

この調査に同行した当時31歳のゲーテは、友人メルク宛に次のような興味深い報告文(1780年10月27日付)を書いている。

「私たちは確かな火山を見つけました。巨大な火口、灰、黒電気石の結晶岩などがその中にあり、溶岩ガス、溶岩、テラス岩、あらゆる種類の玄武岩などは、方々から取り寄せたものでも、書物に載る不十分な状態のものでもなく、すべてが距離にしてほんの数分離れた地域で取り出したもので、手で掴むことができるものです。」(WA IV. 4. 309-312)

ここには、ゲーテがこれまでに目にしてきた岩石や鉱物の収集品や、書物から学んだことを、自分で確かめるために、自ら実地調査に挑んだ様子や、火山の痕跡を見つけようと格闘する彼自身の感情がにじみ出ている。

エンゲルハルトは、ゲーテの詩や日記、手紙などを読み、同じく地球との対話をし続けるゲーテと向き合い、その彼と対話しながら自らの書を執筆していたことが手に取るようにわかる。その際彼は、これまでしばしば個別のテーマに限定したゲーテの伝記に見られたように、一つのテーマだけを追いかけることはせ

1786年イタリア旅行直前までのゲーテの年譜 (自然とのかかわりを中心として)	ブラを知る
西暦(年齢)事項(『 』は文学作品, 太字 は自然科学論文)	1777 (28) ハルツ旅行, ブロックン山登頂, 『ヴィルヘルムマイスターの演劇的使命』起稿
1749 (0) マイン河畔のフランクフルト市に生まれる	1779 (30) 第二次スイス旅行, 戯曲『イフィゲーニエ』
1776 (17) ライプツィヒ大学入学	1780 (31) フォークトとチューリンゲン地質調査旅行
1768 (19) 7月 ^{かっけつ} 略血, フランクフルトへ戻る	1781 (32) イエナ大学ローダー教授より解剖学講義授ける
1770 (21) シュトラースブルグ大学入学. 10月フリードリーケ・ブリオンに恋す	1782 (33) イエナ大学総合鉱物研究所設立, 9月, 第2次ハルツ旅行
1772 (23) 5月, ベッツェラーへ赴き, シャルロッテ・ブーフを知る	1784 (35) 人の顎間骨発見, 『上顎の顎間骨は他の動物と同様人にも見られること』『花崗岩について』『全地質生成の基盤としての花崗岩』6月-7月初旬, チューリンゲン地質調査旅行, 8-9月中旬, 第三次ハルツ旅行
1773 (24) 初稿『ファウスト』執筆開始	1785 (36) 植物及び地質学の研究『岩石成層の理論のために』6月末-7月初旬, ポヘミアのフイヒテル山地調査旅行
1774 (25) 3月, 『若きヴェルテルの悩み』完成	1786 (37) 9月3日, カールスバートからイタリアへ向けて出発
1775 (26) 1月, リリー・シェーネマンを知り, 4月婚約, 9月婚約解消 第一次スイス旅行. カール・アウグスト公からヴァイマルへ招待される. 11月ヴァイマル到着, シュタイン夫人知る	
1776 (27) 5月4日初めてイルメナウへ, 鉱山見学, トレ	

ずに、すでに述べたように、ゲーテの自然研究と深いつながりのある公的、あるいは社交的生活や、哲学や文学にも及んでいる。

本稿も、彼に倣って、ゲーテの大地へのロマンの追求の過程を追いかけつつ、もう一つ、ゲーテが自然と接する時、きまって向き合う友人や恋人たちの小伝も、折に触れて付け加えてゆこうと思っている。なぜなら、ゲーテは、大地という自然と取り組む時はいつも、この地球のロマンや、石の国の不思議についてや、そこで身を持って体験したことなどを、友人や恋人に伝えるのが常だったからである。

本稿ではまた、ゲーテの書簡やメモ、日記や文学作品の中のゲーテ自身の言葉はできるだけ多く取り込んでゆくつもりである。ここではこれまでの引用文に加えて、もう一つゲーテが最も熱狂して地球の自然と取り組んだ1780年時の、先に挙げたチューリンゲン地方の地質探検旅行中に、ヴァイマル時代の恋人のシュタイン夫人に宛てた次の一通の手紙も取り上げておきたい。

「私たちは、岩という岩をハンマーで叩いています。また私たちが花崗岩の上に乗って熱狂しているのと同じく、取り出された石は、何頭もの牛の背にゆられてうっとりとしています。(・・・)これまでシュマルカルデン地方のシュタールベルクに滞在していましたが、ずいぶん色々なものを見てきました。あなたもどうか、大地の友になってください。それはとても素晴らしいことです。」(9月11日, WA IV. 4287f)

ゲーテが自ら、「大地の友」になったと感じた瞬間の素晴らしい感動と喜びを、恋人に伝えた時のものがこの手紙であるが、この文を取り上げたのは、この中の「大地の友」という言葉をそのまま、このレポートの題名として借用することを意図したからである。ゲーテが「大地の友」と自覚するまでの過程と、同じく「大地の友」としての彼の歩み方や問題意識の展開などを、彼の伝記的な枠組みの中で見ていこうと思っている。

KOKUBUN Yoshiji (2011) : Goethe, as a Friend of the Earth.

<受付: 2010年6月28日>